

アメリカ大学新事情

——ハーバードとMIT

竹 沢 泰 子

京都の姉妹都市、ボストン。そのボストンの隣にチャールズ川を挟んで位置するのがケンブリッジである。ここにハーバードとMIT（マサチューセッツ工科大学）がある。二つの大学で得た経験から、ここでは授業スタイルについて紹介したい。

MITはキャンパス全体が、ハーバードも大半の図書館や教室が、ワイヤレスで、内部関係者用の認証システムをクリアすれば、自分のパソコンからインターネットを自由に使うことができる。これが最も効力を発揮する場合は、授業である。例えば私が聴講していた「帝国と科学」では、若い教員が毎回関連するサイトを用いて、ビジュアル・イメージを講義に取り込んでいた。ジェームズ・クックの船や現地の様子、世界地図の歴史の変遷、優生学の研究対象とされた人々の写真、今日のエイズ感染地域などなど。毎回全部自分で準備するとなると相当な労力と時間を要するが、信頼

できるサイト（例えば各国の国会図書館や大学など）を用いれば、授業で重宝することになる。ただし、MITの元同僚の話では、授業中に学生が、インターネットを利用してこちらの講義内容が正しいかどうかをチェックし、文句を言う場合もあるらしい。

両大学とも大抵、個々の授業には専用サイトが設けられる。教師は、所定のフォーマットにしたがって入力し、どの範囲の人々にアクセスを許可するか（受講者のみ、キャンパス内、制限無しなど）自分で決められる。このサイトに、授業概要やシラバスから始まり、関連リンク、リーディングスや宿題などをアップすることができ、ディスカッションは、全員参加型であり、関連ニュースなどの情報交換、意見交換ができる場となっている。毎週の課題論文は、学生がそのサイトからPDFファイル形式でダウンロードする仕組みである。論文の著作権も、出典を入力してチェックマークを入れると、自動的にクリアできる。

ちなみに、現在アメリカ合衆国において、論文集（テキスト等を除いて）の売れ行きが壊滅的である一因は、上記のような教育システムの転換にあるようだ。必要箇所だけPDFファイルにして廻されると出版社が嘆いていた。

MITでは、学生たちに恵まれたこともあり、私自

身授業経験から大いに啓発された。今年の京大文学研究科社会学での講義は、試験的にM I Tと同様、一回三時間とし、一時間講義、一時間演習、一時間ディスカッションを予定している。M I Tで英語による講義が務まるか案じていたが、終わってみると、M I Tで授業をするより、京大で授業を行う方が難しいと思っただ。学生をディスカッションに導く苦勞、緊張感をもつて講義ノートとハンドアウトを作成し授業に臨むといった自分自身の姿勢―。

いずれにせよ、七年に一度くらいの(半強制的)サバティカルは、われわれの研究・教育活動をリフレッシュさせる上では、不可欠だと思う。

今週の授業で使用するサイトのひとつは、以下のアメリカ哲学協会所蔵の優生学関係のデジタル・アーカイブである。学生の反応は果たしてどのようなものだろうか。

<http://www.amphilisoc.org/library/mole/a/aes.htm#boxfolder2>

感謝、叢書集成

古勝 隆 一

大学入学以来、漢籍のたくさんあるところで学んできたので、資料不足の苦しさというものを切実に味わったことはなかった。たいていの文献は図書館にあった。むろん、そんな幸福がいつまでも続くと思いがていたわけでもなかったが、万事、恵まれた人間はそうのように呑気なものであろう。

研究所の助手勤務の五・六年目には、転出先を求めてかなり苦しんだが、その時、千葉大学が与えてくれた採用の知らせは、嬉しいものであった。新しい地で、生まれ変わったつもりで努力しようと思ひ、そして私は確かにある程度、生まれ変わったのかも知れない。助手のころ、かなり行き詰まっていた論文書きにしても、授業や雑務の傍ら、いつの間にか軌道に復帰したらしい。

ただ千葉大学に漢籍が少ないことは赴任前から予想できたものの、やはりそれは未経験のことに属した。自分の研究はさておいても、図書館の漢籍の乏しさゆえ、授業に差し支えが出るのには困惑した。著作権問

題のない、和刻本の『四書集注』を講読のテキストにしようとしても、そんなものは影印本すらなかった。

しかしそこで「こんな書物のない大学では勉強できるはずがない」と言い放つような教師にだけはなりたくなかった。私にとつての希望の地において、そのような絶望的な考え方は似つかわしくないように思われた。

そのような中で、私を救ってくれたのが京都から持っていった新文豊版の「叢書集成」であった。一九三〇年代、古文獻の集成を目指して作られた巨大な叢書の叢書ともいべき書物である。実は、百二十冊に及ぶこの巨冊は私のものではなく、助手時代の先輩、稲本泰生さんが転出された際に借り受けたものである。研究所に在る限りあまり用途はなく、まさに高閣に束ねるよりなかった。他により読みやすく、よりよく整理された本があったからである。

しかし千葉の地において、「叢書集成」はありがたき本であった。たいていの書物がここにあるという安心感は何ものにも代えがたかった。自室に信頼できる小図書館があるようなものである。底本が悪いとか、排印が誤っているとか、字が小さいとか、細かいことはいってられない。講読中、難所に当たった際、「叢書集成」を開いてみせて学生の疑義を解くことができたのは、私にとっては喜ばしい体験であった。電

子的なデータベースから「検索結果」を示したところで、晴れやかな納得の表情をみることはできない。

さて人文研に戻り幾ばくかの時が過ぎた今、「叢書集成」はいまだに梱包されたままである。もとの持ち主にお返しすべきなのか、あるいは代価を払って買い取り、吉田キャンパス内に移転した後、ふたたび活躍の機会を与えるべきなのであろうか。思案のしどころである。

柔らかな背中の中の街

久保 昭博

サラ・コフマンの『オルドネル通り、ラバ通り』（庄田常勝訳、未知谷、一九九五年）を読んだのは、パリでの留学を終え、京都に移り住んでからである。実はこの二つの通りがあるバリ北東部の、アラブ系、アフリカ系移民が多く居留するうらぶれた界隈は、私が四年間を過ごした場所である。オルドネル通りは18区の両端をつなぐほど東西に長く延びた通りである。

この道の東側は、少し前までは（今でもある程度は）麻葉と犯罪のはびこる区域として知られたグット・ドール界隈の北限となっていた（少なくとも私の地理感覚ではそうだ）。そしてそのオールドネル通りのひと筋南にこれと並行するマルカデ通り——ここに私は一時期住んでいた——と、これら二つの通りと直角に交わって北のペリフェリック（環状道路）に通ずるポワツンニエ通りの交差点から、モンマルトルの丘に向けて南西に細い坂道となっているのがラバ通りであり、その東側は現在スリランカ人街となっている。このようにわざわざ訪れる人もないであろうがゆえに、一層自分の生活に密着していた場所の名が、ニーチェやフロイトを論ずる哲学者の著作に付けられているのを見て、最初は不思議な感じがしたものだ。だがコフマンにとってここは、彼女の運命を決定づけた場所であったのだ。『オールドネル通り、ラバ通り』は、ナチスドイツ占領下にあるパリのまさにこの場所で、ユダヤ人として少女時代を過ごした哲学者の自伝である。彼女はそこでラビの父親が警察に連行されるのを目の当たりにし、その後一斉摘発を逃れた母と自分をかくまってくれた「メメ（おばちゃん）」と呼ばれる女性の家で、もうひとつの「戦争」に巻き込まれた。サラを我が娘のように可愛がるメメと実母は、少女の取り合いを演

じ、彼女はふたりの「母」の間で、またその各々が体现しているユダヤとフランス（カトリックというよりは共和主義のフランス）の間で板挟みになって、戦中戦後を生きたのだ。この二つの「戦争」を物静かに語るコフマンの自伝は、この町についての私の記憶と印象の中に、古傷のようなものを残した。

さて二つの通りは、それぞれ自宅（オールドネル通り）と、メメの家（ラバ通り）の所在地である。それゆえこの自伝の表題を、ふたりの「母」の比喩とすることは容易であろう。さらに幾人かの批評家は、オールドネル（Ordener）の中に「秩序（ordre）」を、またラバ（Labat）の中には「彼方（la-bas）」を見いだしているようだ。ユダヤ的秩序から彼方に望む共和国フランスという解釈は少々あざとい気もするが、精神分析批評に通曉している著者のこと、そのような読解を誘発することを仕組んだのかもしれない。この解釈の是非はさておき、名によって場の印象が形成されるということはある。『オールドネル通り、ラバ通り』にも著者が通っていた小学校のある通りとして登場するドウドーヴィル通り（Rue Doudeauville）に前述のマルカデ通りから私が越した折、友人が「水はどこから来る？の街」（d'où d'eau ville）と言ったのに対し、私は、いや、「柔らかな背中街」（doux dos ville）

だよ、と答えたのだが、戯れに口を突いて出たこの表現は、その後奇妙にも脳裏を離れず、街のイマージュと結びついてしまった。今ではこの界限のことを思い出すたびに、緑や黄色の色鮮やかな布で黒い赤ん坊をくくりつけた、恰幅の良いアフリカ系女性の柔らかな背中が目に浮かぶ。

それぞれの浄土

齋藤 智寛

はじめての台湾ゆきで楽しみにし、じじつ楽しかったことの一つに、仏教団体の道場見学があった。現代中国の仏教は激動の近現代史とともに今なお形成途上にあつて、唐宋の禪宗を題材にその宗派意識の形成を追ってきたわたしにとっては、それが大きな魅力なのである。

浄土宗文教基金会という団体の特徴はいくつか数えるが、わたしに最も強い印象を残したのはやはりその教義が発展途上にあることであつた。かれらはもと

「現代禪」と名のる禪定修行の団体だったが、開祖の李元松師が逝去する直前に教団ごと浄土宗に宗旨がえしたという特異な経歴を持つているのである。

年譜によれば、二〇〇三年初め病に倒れた李師は信徒に念仏の専修を指示、「現代禪」を「弥陀共修会」に改めると、年内に四十六歳の若さで世を去った―信徒の言い方を借りれば「往生」した―。かくて師のおもいがけない早世後に取り残された信徒たちは、それぞれのやり方でその教えに向き合い修道を続けることとなつた。經典の読書会を開いて知解の研鑽にはげむ人々もいれば、ひたすら念仏の行に身をゆだねる人々もいる、という具合に。

中でも、急激な教義の変化を信徒らがどう受け止めたのか、これがわたしには不思議であつた。禪を補完するものとして念仏を並修するのは中国仏教に普遍的な傾向であるし、「心こそが浄土（唯心浄土）」との口号もまた禪と相性がよい。しかしかれらの場合は禪浄双修ではなく完全なる回心であつたし、信徒の一人によればかれらは唯心浄土ではなく法然流の他力念仏を正宗としている。こうした根本的な変化を支える理論を、李師は示さないままに世を去ってしまったらしい。こちらの質問に対する信徒の方々の答にはしばしば「自分の理解では」との前置きがされたし、わたしそ

つちのけで議論や異議申し立てがおこなわれる場面もあったのである。

師の最後の示教をみずから拒み、その円寂後にはじめて大悟したある唐代の禪師は、自分が感謝しているのはじつに師がそれを説き明かさなかったことだと述懐している。李師がその信奉者たちに晩年定論を示せなかったのは、もとより信徒の望んだことではない。けれどかれらは、師をうしなつたがゆえに師と出合い続けるのだから、それがすなわち自己との出合いでもあり続けるのだらう。かれらの浄土がそのような場所であることを、わたしは心から願っている。

〈人文科学協会奨励賞受賞者〉

本を並べる

片山 杜 秀

深夜の暗闇の向こうで、シャリツとかサラツとか、軽いものの滑る小さな音がする。しまったと思ったときはもう遅い。たちまち続いてドタンバタンと大崩壊

が起きる。ほんの数秒で瓦礫の山だ。

といつても、崖崩れや土石流ではない。本のなだけなのだ。

数年前、荷物の多さを理由に前の居所を追われ、今の家に越した。一階は元は建設会社の作業場である。中規模のスーパーマーケットでも開ける程度の広さがある。だが、あまりにがらんどで、天井も高すぎる。その空間に、それまで使っていた書架が似合わない。やむをえず、蔵書のほとんどはダンボールに入れたまま積みっぱなしになった。

どうしてもあの本が必要というときは、何百箱かのダンボールをこじあけて探す。そうしてばらした本を適当に積む。新しく増えた本も積む。何年かそんなことを繰り返したら、身長よりも高い、甚だしく不安定な山なみが出来た。テレビのワイドショーでよく取り上げられる「ゴミ屋敷」を笑えない。

これはもう限界だ。仕事を二の次にし、本を並べることにした。折々に買い足してきた棚を総動員し、壁に打ち付けたり、転倒防止バーを渡したりする。棚の総延長は約四百メートルになった。雑誌や文庫やプログラム類、それから楽譜とかの分はとてもないが、いわゆる単行本だけなら収まりそうな計算だ。

そんなにたくさん本を溜め込んでも、どうせ読みき

れないのだから、いい加減にしろと、周囲から言われ続けてきた。私も以前はよくそう思った。しかし、あるとき考えが変わった。ずっと読みたいと願いながら果たせないつもりでいた本を、ようやく嬉々として読んだ。そして結末にそれなりの感慨を持ち、最後のページに至ったら、紛れもない自分の筆跡で何年か前に読み了えた日付がペン書きされていた。しばし呆然とした。

そういえば、読んでいないのに読んだつもりになって、なぜかその内容を他人に説明できてしまう本もある。そうかと思えば、読んでもそれを忘れ、知らないつमりの本もある。

ということとは、読んだ読まないなんて、もうどうでもいいのではないか。知らないものを類推してついには知っているつもりにさえる傲慢な作用が一方にあり、知ったことを忘却してしまう哀愁漂う作用がもう一方にある。そして、この傲慢と哀愁の狭間にはまるためには、記憶しきれない物量が必要である。何の因果か、私は今のところこの狭間から抜け出したいと思えない。道から外れた気もするが、とにかくそこに一種の快楽があるのである。

結局、書架は目論見よりもだいぶん足りなかった。近々、もっと増やそうと思っている。